
碧ちゃんの家庭教師

和藤渚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

碧ちゃんの家家庭教師

【Nコード】

N1809D

【作者名】

和藤渚

【あらすじ】

入学式の日1つだけ席が空いていた。その時さほど京介は気にしていなかったが、一ヶ月たってもその席はあいたままだった・・・

不登校のお嬢様

「それでは、自己紹介してもらおう。1番から」

「新井京介です。1年間よろしく」

俺の名前は新井京介。陽城学園に通うたぶん普通の高校1年生。

京介はいま入学式で自己紹介していた。どんどん自己紹介が行われていく。

「本田碧さんは休みだったわね」

「中学からの人たちも高校からの人たちもみんな仲良くね」

一ヶ月たつても1つ空席があった。それは・・・

「本田碧さん、本田さん？今日も休みつと」

そして休み時間

京介は周りの人と仲良くなっていた

「なあ本田碧つてどんなやつなんだ？」

「京介、気になるのか？」

「そっか京介は入ってきたばかりだもんな」

「本田さんはずっと不登校なんだ。中2ぐらいまでは来てただけど。ある日突然こなくなつたんだ。うわさではいじめられてたつてなつてるけど、実際の理由はわかんないんだ」

「けっこうかわいかったんだぜ？学校でも1位、2位を争うぐらい」

「それから本田さんを受け持つ担任の先生が家に行ってるんだけど、全然ダメ。会つてもすぐ暴れるらしくて」

「そっか・・・」

（なにがあつたんだろう？）

「なんで不登校なのに進級できんだ？」

「あゝそれは理事長の孫だから特別措置が取られてるんだよ」

「確か卒業式では名前だけ呼ばれてたような」

「いいなゝおれも理事長の孫に生まれたかったよ」

とグチをこぼす京介の友達凍也であった。

「お嬢様？昼食ができました。」

「ありがとう、そこに置いというて」

「かしこまりました。」

「お嬢様？今日は天気もいいですし外に出てみては？」

「遠慮しとくわ、窓開ければ風も入るし、陽の光の入るから大丈夫」

「さようでございますか？それならどうぞこゆっくり」

と部屋を後にするお手伝い。

「どうだった？」

「ダメだった」

、 「またか・・・」

「どうしたのかね？あれからずっと引きこもっちゃって」

「それがさこの間聞いたんだけど」

「あなたたちなにやってるんですか！！早く仕事に戻りなさい」

「はい」

「お嬢様・・・」

そして放課後

「京介、一緒帰ろうぜ？」

「いいぜ」

「でよ？・・・だったんだぜ！！」

「ハハハなんだよそれ？」

「じゃあここだな」

「ああじゃあな」

と京介は凍也たちと分かれた

「やべードラマの再放送が始まる！！仕方ない近道だ」

と京介はある家に入った。それは京介にとっては当たり前のことだった。

（この家がかいけど一体誰が住んでんだろっ？）
と思いほく前進で進んでいると

（女の人だ。）

長髪で清楚な感じの女の人がいた

「あっアヤメが咲いてる！！」

どうやら花壇に水をやっているようだった。

（やっぱお金持ちって感じだな）

門がみえてきた。

（このまま突っ走れば間に合うな）

と思った矢先、京介はその女の人に見つかった。

じっと見つめる女の人。

2人は一瞬時間が止まった。そして

「きゃ〜〜！！！！不審者よ〜〜！！！！」

と言う悲鳴とともに動き出した

するとサイレンが鳴り響き、どこに隠れていたのだろうか？

一斉に黒ずくめの男たちが迫ってきた

（なんだ！！！？こいつら？やばい早く突破しないと）

と思ったのだが進行方向はふさがれていた。

（とにかく逃げよう）

「あっちへ行っただぞ！！」

と、とある家の敷地内を走り回るハメになった京介であった。

（こいつらはえ〜）

と逃げ惑う京介。

「どこいった？」

30分が経ち、疲れてきた。

（なんだよ？この家は？しつこいな・・・もとはと言えば俺が悪いんだし・・・とにかく事情を話して謝らないと）

と思い家の中に逃げ込んだ

「中に逃げ込んだぞ！！」

（ふう〜なんとかあいつらからは逃げられた。）

ホッとしたのもつかのま

「よくここまで逃げられましたね？ですがここまでです！！どうせ

お嬢さまを物色してたんでしょう？許しません！！！」

とこの家で働いている執事と思われる人がゴルフクラブを持ってやってきた

「ちよつと待ってください、誤解です」

「どんな言い訳しても同じです！！！」

とゴルフクラブを振り回してきた。それをなんとか突破し、正面の階段を上った。

どうやら聞く耳を持たない様子。

「たくつなんでこうなんだよ？」

と追われる京介。

「逃がしませんよ！！！」

「こちらは執事中村、いまターゲットは私を突破し階段を上っていきました。なんとしてでもあの部屋にだけは入れないように願います」

「了解」

「了解」

と連絡を取り合う中村

その頃京介は2階の廊下にいた

「はあゝ何してんだろう俺・・・」

「どこいった！！！」

（ヤバイ！！）

と人の声が迫ってきた。

京介はとつさにとある部屋に入った

「どこいった？」

「なんとしてでも見つけるんだぞ」

「ふうゝなんとかしばらくは安全だ」

としばらく停戦と思った京介であったが

後ろの気配を感じ振り向くと年は京介と変わらないくらいの一人の女の子がいた

「すいません、隠れさせていただいてます」

というとその女の子は怯えていて全く動かなかった。

京介は目を凝らし、女の子に近づいた。

「こないで・・・いや・・・」

と絞り出すような声で言う。と女の子は倒れた

そして2時間後女の子は気がついた

「うん？うん」

「気がついたか？」

「うん？」

女の子は目が覚めたばかりでまだぼやけていた。

視界がはつきりしていく

「きゃー！！男ー！！！！出て行つてー！！！！」

と物を投げてきた

「ちよつと落ち着けて、なあ？」

「うるさい！！男なんて男なんて・・・」

と泣きだした。

「どうした？」

と近づく京介。

「近寄らないでっていったでしょ！！」

「すいませんでも・・・」

とそれでも京介は近づき落ち着くまでなだめた

「ていうかあなたはうちに何のようよ？」

と怒ったようにきかれたのでいままでの経緯を話した。

「たくつ！！バカ姉ったら・・・ここを通つていくあんたもあんた

よ！！！！いつもハラハラして見てたんだから」

「バレてた？」

「当たり前でしょ？上からはなんでもわかるんだから。」

「そっか。でもあそこ通つたほうが家が近いから」

「たく・・・」

（なんでだろう？私、ちゃんと会話できてる。）

「とりあえず脱出法を考えないと」

「自分で考えなさいよ？ 私関係ないんだから」

「そうだけどさ？ 家の構造がわからないから君にも手を貸して欲しいんだけど」

「仕方ないわね、やることはこれと言ってないから考えてあげるわよ」

「ここから一番近い出口はあそこだけどおそらく大きなところは警備強化してあるから」

「薄いとこは・・・裏門だ！！！一番人通りが少ないから、ここを通れば早くつくよ」

「それだ　！！ありがとう」

「なに喜んでんのよ、まだ脱出してないでしょ？」

「そうだな。」

そして作戦実行し見事に成功

「もう２度と来るんじゃないわよ？」

「それはどうかかな？」

「まったくもう・・・」

「そーいや名前聞いてなかったな。俺、新井京介。君は？」

「本田碧よ」

（この人が本田碧？見た感じイジメられるというより、イジメそうなイメージなんだけど）

と思いながら見てると

「なにじろじろ見てんのよ！！」

「いやなんでもない」

（俺、ずっと学校で待ってるからな）

と思いつつ本田邸を後にする京介であった。

筋肉痛と会話

翌日

ピピピピピピ

「京君！！！早く起きないと遅刻するよ」

と母親に起こしに来るが京介は反応なし。

なので

「起きろ～～～～！！！！！！バカ京介～～～～！！！！！！」

「うわ～～！！」

と3つ上の姉の美咲に耳元で起こされる。それがいつもの新井家の朝である。

「重い……」

「さっさ起きろ。」

「わかった。わかったから降りて」

「うつ！！」

（全身痛い……筋肉痛か？昨日あんなだけ逃げまわったもんなん）

そう思いベッドから降りた。

京介は運動不足がたたったのか全身筋肉痛になっていた。

「姉ちゃん今日速いじゃん」

「うん、今日講義1時間目からだからよ」

美咲は有名大学の慶楼大学の1年である。

高校までは真面目一筋だった美咲であったが、なにがあつたのか大学に入るととたんにはじけてしまったのだ。そのせいか起こし方も高校までは母親と同じような感じだったのが今に至る……

「京介？似合う？」

と美咲が執拗に聞いてくる

「う……うん似合ってるよ」

「ほんと？やったー！！」

と嬉しそうにはしゃぐ美咲を

（たくつ弟に言われてこんなに喜ぶなんて・・・彼氏でもできないものなのかね？姉ちゃんだったら寄ってくる男いそうなのにな・・・そしたらこれも収まるんだろうけど・・・）

と思う京介であつた。

美咲は真面目一筋であつてもはじめてもブラコンだけは変わらなかつた。

そして朝食を取つて学校に向かつた。

「いつてきまゝす」

教室に着くと

「おはよう」

と凍也が後ろから背中をたたいてきた。

「いてつやめろよ!!」

「ごめんごめん」

と凍也は謝つた

その時京介は碧の机を見た。

「昨日は、ありがとな」

「ん？」

「いや、なんでもない」

「そつか」

授業は進み、4時間目の体育の授業になつた

（イタタタ、イタタタ）

凍也たちは京介の様子がおかしいことに気づいた

「なんだ？あいつ」

昼休みになり、昼食を取つていた

「京介、今日の体育おかしかつたぞ」

「てか、今日の京介おかしいぞ」

「いや、すごい筋肉痛で」

「なんで？」

（本田碧の家を逃げ回つたつていえないよ・・・）

「いや、昨日家の手伝いしてたらね」

「筋肉痛か・・・俺も運動してねえな最近」
と凍也がぼやく。

「だから俺さ、部活入ろうと思ったんだけど5月だし、入りづらいんだよね」

「お前、中学でなんか部活してたのか？」

と聞く京介の友達、英樹。

「まあ野球部で補欠だったけど、お前らはなんかしてたのか？」

「俺は水泳部で今もやってるよ」

「凍也は？」

「俺は卓球部だった。レギュラーだったぜ。」

「そうそうこいつ中学のとき関東大会準優勝したんだよ」

「へーおまえがね・・・」

「でも卓球部ってなんか根暗が多くてぜんぜん活気なさそう」
放課後京介は帰っていった。

「あゝ今日、疲れたわ・・・また近道しよう」

（でも昨日あんなことあったし・・・まあいいや）

と京介は本田邸に入ってしまった。

「あんだまた！！」

「うわゝいつの間に。」

と驚く京介

「ウチに入ろうとするあんたが見えたのよ。たく懲りないわね」

「いったらう？ここ通ったほうが近道だって。でも昨日あんなことがあったからどう突破しよっかなって思ってた」

「しょうがないわね。ほら行くわよ」

「え？」

「また昨日みたいになってもらったら迷惑なの！！」

と京介は碧と本田邸に入ってしまった。

「イタタタ、イタタタ」

「どうしたの？」

「いや昨日逃げ回っただろ？だから筋肉痛で」

「だらしないわね。運動不足なんて」

「ずっと自分の部屋の中に閉じこもってるやつに言われたくないね」

「新井君？」

「あのさ、京介でいいよ。苗字で呼ばれるのあんまり好きじゃないんで」

「なら京介？」

「なんだ？」

「陽城学園だよ、その制服」

「ああそうだけど」

「私もね同じ学校なんだ」

「やっぱりな」

「1年4組37番本田碧だろ？」

「なんでそんなことまで。もしかしてストーカー？」

「なんでそうなんだよ！！違うに決まってる！！」
と必死に否定する京介

「バーカ。なに必死になってんのよ。冗談よ、冗談」
と笑った。

（なんだろう？この安心感。）

「お前の笑顔初めて見た。かわいいな」

と京介が言った。すると

「何言ってるのよ！！」

と碧は顔が赤くなった。

「そっぴや、なんでそこまで知ってるの？」

「ただのクラスメートだから」

「そうだったんだ」

「じゃあここで」

と京介は本田邸の正門に出た

「お嬢様・・・」

そして京介がこうやって帰る日が数日続いたある日

「・・・でよ・・・」

「まじで？」

と凍也たちと帰っていると目の前にリムジンがやってきた

「なんだ？」

そしてドアを開けて出てきたのはタキシードを白髪の高背の男だった。

「新井京介とおっしゃられる方は？」

「俺ですけど、なにか？」

「とにかくお乗りください」

「は」

京介はリムジンに乗った。

「おい！あいつやばくねー？」

「何話てんのかな？」

と怪しむ二人

「すいません、いきなり。わたくし私本田様の家で執事をしております、中村と申します。以後お見知りおきを」

と中村は名刺を京介に渡した。

「は・・・で執事の方が俺に何のようですか？」

「お嬢様のことなんですが」

「お嬢様？あ！碧のこと？」

「ええ。最近お嬢様。少し変わったように見受けられます。」

「少し変わった？」

「はい。この間まではずっと部屋に閉じこもって出てくることなく、食事もいつもドアの前に置いていたのが、食事時になると出てくるようになりました。ある時間になると庭にでるんです。しかも楽しそうに。あんなお嬢様久しぶりに見ました。いままでは何を言っても出てこなかったのに・・・」

「そうなんですか」

「すいません、あの引きこもりになった原因ってわかります？」

「いえ、私^{わたくし}たちにもわかりません。こんなの初めてで」

「そうですね・・・原因がわかればなんか解決策が見出せると思っ
たんですけど」

「ありがとうございます。やさしいんですね。お嬢様のことをそん
なに」

「いえいえ、ただクラスメートとして心配なだけですよ。」

「それで1つお願いがあるんですけど」

「なんですか？」

「あの～お嬢様の専属の家庭教師になっていただけないでしょうか
？」

「はい？」

家庭教師初日

「それで1つお願いがあるんですけど」

「なんですか？」

「あのーお嬢様の専属の家庭教師になっただけじゃないでしょうか？」

「はいー？なにいつてるんですかいきなり！！それに勉強なんてそんなに・・・」

「確かに勉強を教えてもらいますが、成績のことはとにかくいうことはいたしません。ただ・・・」

「ただ？」

「ただ・・・あなたにお嬢様のお話し相手になってほしいのです。その方が学校、いや外の世界に出られるかもしれません」

「外の世界？」

「はい。実は引きこもってからの言うもの屋敷の外にでてないんです。」

「そうなんですか」

「報酬はいくらでも払います。お嬢様をお救いください」

「そんなこと言われても・・・」

と戸惑う京介に

「お願いします！！あなたしかいないのです！！」

と中村は京介に泣きついた

「わかりました、わかりましたから離れてください」

「引き受けてくれるんですね？」

「ええ・・・まあ・・・」

「ありがとうございます、ありがとうございます」

とどこかの選挙の立候補者みたいに京介の手を握り喜ぶ中村であった
「はい、はい。」

というわけで京介は碧の家庭教師を引き受けたのである。

そして家で夕食を食べていた

「ねえ、お姉ちゃん勉強教えてよ」

「いいわよ。京介の言うことなら何でも聞いてあげる」

と美咲は京介の顔をすりすりした

「ちよつと姉ちゃん！ー！離れてよ！うゝん」

と京介は美咲を離れた。

「どうしたんだ？いきなり勉強って」

「いやあの家庭教師することになったって」

「え？誰の？」

「それはちよつと・・・」

「言えないんだ？」

「うん」

「まあいいや。ちゃんと教えるのよ？」

「わかったよ」

「教えるのは、女の子か？」

「まあ・・・そうだけど」

「うそー！！」

「ホント！！？」

「一つ言っておくが、恋愛関係に発展しても俺はかまわん。1人の人間としても学ぶところはたくさんあるからだ。しかしくれぐれも高校生らしい付き合いでな、高校生らしい」

と京介の父がいった。

「なんでそんな話になるんだよ？」

翌日

「おい！！昨日の怪しい人誰だったんだよ？」

と凍也が聞いてきた

「ちよつとね」

「心配だったんだよ？いきなり車に乗るんだもん。警察にも言おう

かともおもったんだから」

「そうなのか」

そして放課後

「なあ？今からカラオケいかねー？」

「いいね」

と凍也の誘いにのる英樹

「ごめん、俺無理だわ」

「なんで？」

「用事あるんだ」

「そっか」

「また、今度な」

「ああ」

（カテキョーつつつたらなんていわれるんだろう？）

そう思いつつ京介は本田邸に向かった

「は？家庭教師？」

「ええ。学校に行かなくなってから勉強してないでしょ？」

「だからって勝手に決めないでよ！！私はイヤよ」

「しかし、最低限の教養は必要かと。」

「余計なお世話よ！！！！」

ピンポン

「あの新井ですけど」

「はい。お待ちしております。中村さん？」

「どうやらきたようです。いいですね？くれぐれも粗相のないように」

と碧から去る中村。そんな後姿に

「私は絶対勉強なんかしないからね」

と叫んで碧は部屋に戻っていった。

京介は中に通されて、碧の部屋に案内された

「ここです」

「どうも」

「いまのメイドさんかわいかったな」

「誰が、かわいかったって？」

「さっきのメイドさん」

「ああ美奈紀さんね」

「美奈紀さんか・・・」

「たぶんこの屋敷で一番かわいいと思う・・・って京介！！なんでここにいろの」

「だって中村さんに頼まれて。てか気づくの遅いし・・・」

「もしかしてあなたが私の家庭教師？」

「そうだけど」

「冗談じゃない！！なんで同い年の人に教えられないといけないのよ！！しかも私よりバカそうだし・・・」

「悪かったね〜バカそうで」

「まあいいや。とりあえず部屋にはいるわよ」

「あ！はい」

と京介と碧は部屋に入った。

「何飲む？紅茶でいいね」

と間髪入れずに碧が言った

「はや！！俺何もいつてないよ？」

「私が紅茶っていったら紅茶なの」

「なら、最初から聞くなよ」

と不満げな京介。

「じゃ、始めようか？」

「勉強なんかしないからね。しかもなんで私よりバカそう人に教えてもらわないといけないのよ」

と延々と不満を口にする碧に対し

「さっそくだけどテストするから。碧のレベルを知るために」

「ちよつと話聞いているの？」

「はい」

と淡々とテスト用紙を渡す京介

「時間は50分、それからこれ中学レベルだから。」

「うるさいわね！！やらないって言うてるでしょ？」

「へー？逃げるんだ」。確かに高校生が中学の問題が解けないなんて恥ずかしいもんね」

「高校生がね」

と連呼すると

「わかったわよ！！やればいいんでしょ？」

と碧はムキになった。

「分かればよろしい。しばらく何日かはテストだけだから。はい始め」

最初のテストは国語にした京介。

50分後

「あゝ終わった。楽勝、楽勝！！こんなの簡単よ」

と碧は余裕の表情でテストを京介に渡した

「そうか、さっそく採点するね」

というとき京介は採点しだした。

国語

縛る

サボる 答えしぼる

（全然違うじゃねえかよ。サボるって略語だし。しかもともと日本語じゃないし・・・）

意味を答え、短文を書きなさい。

二の舞

意味 踊りの型 答え 意味：人の失敗を繰り返すこと

二の舞の次は三の舞だ あの人二の舞は踏みません。

（踊りの型って・・・どんな踊りなんだよ）

与謝野晶子は詩集・みだれ髪や 物語の現代語訳で知られている

牧場 答え源氏

（牧場ってゲームだろ！！）

小説、吾輩は猫であるや坊ちゃんなどで知られる有名な作家は？
広島東洋カープの4番の人 答え夏目漱石

（誰だよ！！）

社会（地理）

アメリカの首都は？

コートジボアール 答えワシントンD・C

（国の名前だし！！）

鹿児島県や宮崎県などで火山灰でできた土地の名前は？

ツンドラ 答えシラス台地

（日本じゃないから！！）

社会（歴史）

1192年に誰が何を開いた？

私の姉が股を開いた 答え源頼朝が鎌倉幕府を開いた

（なんだよ！！下ネタじゃねーか！！）

壇ノ浦の戦いで源氏が滅ぼしたのは？

鬼 答え平家

（桃太郎か！！）

理科

植物が光合成を行うとき を使い二酸化炭素と水を取り入れる。

染色体 答え葉緑体

（遺伝子・・・）

と京介は必死に笑いをこらえながら採点していた。そんな日が5日続いた。

そして採点し終えた京介

「どうだった？満点だったでしょ？私がホンキだせばこんなもんよ」

「へーこれがホンキ？つうか俺をバカにしてんのか！！」

と全ての答案用紙を見せる。

「私が、こんな点数なわけないでしょ？採点ミスよ。わかった！これは私をバカというレッテル貼るための陰謀じゃないの？いや、そ

うに決まってる!!」

と剣幕でまくしたてる

「とりあえず落ち着けて。なんでそう思い込みがばげしいのかな？お前は」

と京介は一つため息をしてまた口を開いた

「これがお前の今の実力だよ。まあ、学校行っていないから仕方ないんだけど。」

「どついう意味よ!!?」

と気が気じゃない碧をなだめるように

「まああれだ。これから少しずつやればいい。少しずつ」

(そうだ、少しずつ・・・)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1809d/>

碧ちゃんの家庭教師

2010年10月10日03時32分発行